沖縄の傷という回路

新城郁夫

岩波書店

沖縄の傷という回路

新城郁夫

岩波書店

新城郁夫

1967年，沖縄宮古島生まれ．立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学．現在，琉球大学法文学部教授．専攻は近現代沖縄文学・日本文学，ポストコロニアル研究，ジェンダー研究．

著書に『沖縄文学という企て』(インパクト出版会，2003)，『到来する沖縄』(インパクト出版会，2007)，『沖縄を聞く』(みすず書房，2010)，『まなざしに触れる』(鷹野隆大の写真との共著，水声社，2014)，編著に『攪乱する島』(シリーズ『沖縄・問いを立てる』3，社会評論社，2008)などがある．

沖縄の傷という回路

2014年10月22日　第1刷発行

著　者　新城郁夫（しんじょういくお）

発行者　岡本　厚

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三陽社　カバー・半七印刷　製本・牧製本

© Ikuo Shinjo 2014
ISBN 978-4-00-061002-5　Printed in Japan

R〈日本複製権センター委託出版物〉　本書を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上の例外を除き，禁じられています．本書をコピーされる場合は，事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください．
JRRC　Tel 03-3401-2382　http://www.jrrc.or.jp/　E-mail jrrc_info@jrrc.or.jp

沖縄の傷という回路

目　次

序　生のほうへ……1
1　普天間米軍基地ゲート封鎖という出来事　1
2　教　え　7
3　秘密の生成と転送　14

I　「集団自決」という傷をめぐって

第1章　沖縄の傷という回路……23
1　原発と沖縄と――危機の産出と危機の隠蔽　23
2　八重山教科書問題から痛みの記憶を拾い集める　27
3　国から自律した生の繋がりと傷という回路へ　34

第2章　反復帰反国家論の回帰――岡本恵徳の思想を読む……41
1　反復帰反国家論の契機――「日米共同声明」と国政参加拒否　41
2　「異質性」という争点　45

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　岡本恵徳の「水平軸の発想」――「集団自決」と復帰運動との葛藤から　52
4　ふたたびの国政参加拒否のために　61

第3章　聴く思想史――屋嘉比収を読み直す……69
1　「当事者性の獲得」という試練　69
2　「他者の声」と「仲間内の語り」　76
3　聴く思想史へ――沖縄研究批判としての沖縄学へ　83

第4章　故郷で客死すること……91
――『名前よ立って歩け　中屋幸吉遺稿集』論
1　「名前」の前で　91
2　非―主体化する呼びかけ　96
3　「世界の内部にオキナワがあるとして……」という声　101
4　故郷で客死すること――「殺スノモ　死ヌノモ　ムツカシイ」　107

Ⅱ　回帰する傷たち

第5章　「死にゆく母」のまなざし……119
1　死にゆく母が見ていたもの　119
2　「炎える母」へ　123
3　死にゆく母を身ごもる　132

第6章　音の輪郭……135
——高橋悠治の音楽とイトー・ターリの身体パフォーマンスを繋ぐ場所
1　アメガフッテル　135
2　ドウシヨウモナク　イタシカタナク　ヌレテユク　138
3　身ぶりの音　145
4　不意なる遭遇にむけて　151

第7章　山城知佳子の映像を読む……159
——汀の眼、触れる手、顔のなかの顔
1　「水の女」、というのではなく　159
2　一つの渦、一本の管、一枚の水の鏡　164
3　脱自（エクスタシス）の倫理（エシックス）　168
4　聞こえてくる声、切れ繋がる身体の群棲へ　171

Ⅲ　他者の傷を迎える

第8章　「不安定の弧」の対位法……179
——沖縄にアラブ民衆蜂起を引き寄せる
1　「合意」の彼方へ　179
2　「商談」のテーブルに着かないこと　184
3　蜂起を輸入し転送する　191

第9章　琉球共和社会憲法試案という企てと脱国家……201
——沖縄と広島と難民
1　憲法を試作することと国家概念の再政治化　201
2　沖縄を否定的媒介として
国民と国家とナショナリズムを擁護する倒錯　208
3　難民
——東琢磨『ヒロシマ独立論』からクィア・ネイションを介してふたたび沖縄へ　218
あとがき　233

＊各章の冒頭、タイトル脇に、下敷きとなった論考の発表年月と初出媒体を示した。

序　生のほうへ

1　普天間米軍基地ゲート封鎖という出来事

平和という言葉が、こうも狂おしい求めとなって口をついて出てくることが、幸せなことであろうはずがない。反戦という言葉が、こうも切なくかけがえのない響きとなって聞こえてくることが、幸せなことであろうはずがない。しかし、幸せというのがなんであったかを忘れそうになっている者のもとにこそ、平和という言葉も反戦という言葉も、切迫した願いの結晶となって届く。平和とは、平和を未だ知りえぬ私たちが、それを求めないではいられない狂おしさのなかで一瞬のうち垣間見る夢となり、この夢は、遍在する非暴力抵抗の無数の力が競り上げあうなかで、あまりに唐突に実現される。そんなようなことを、けっしてはっきりとではなく、とても漠とした思いとしてかかえたまま、二〇一二年九月末、刻一刻と台風が近づいてくる強風雨のなか、誰とも知れぬ人たちとともに普天間（ふてんま）アメリカ軍基地大山ゲート前に座り込んでいた。この座り込みから、すべてが始まる。

凄まじい暴風雨を引き連れている台風による気圧低下のせいだろうか。オスプレイ配備強行にひた走る日米の動きに怒り心頭に発す状態であるのになぜか筋肉や節々がほぐれ、座り込む人たちのなか

で緊迫した安らぎを感じていた。不安と弛緩がないまぜになったような感覚と、座り込むという共同性のなかで感受しているのがどこか官能的でさえある親密な情動であることに気づいて、われながら、奇妙さを通り越していかにも場違いな感覚と思わないではいられなかった。

しかし、場違いと言えば、日本の法が及ばぬ提供区域である普天間基地内主要三ゲート前を完全に占拠し、事実として二日間にわたって基地を封鎖して機能不全に追い込んだ出来事以上に、場違いなこともないだろう。だが、場違いの真骨頂と言うべきこの行為においてこそ、場違いと思われてきた様々な事象が、場違いな空間のただなかで確かな場を占めて、そこに現れるのである。

まず、この場違いな行為を通して、在日米軍基地というものの、言語を絶する場違いなあり方が露呈させられる。つまり、あの広大な「基地」は、日本政府が日米地位協定によりアメリカに差し出している「提供区域」であり、私たちが座り込んでいるこのゲート前が、日本の警察権力はもとより実質的には米軍もその配下にある自衛隊も、私たちに手出しできない法の空隙であることが開示されるのである。普天間基地のあの広大な飛行場が、日本の航空法適用外であり同時にアメリカ国内法規定に照らせば安全基準を全く満たしていない違法性の濃い施設である点は常に確認されていい。私たちが封鎖している普天間基地は、つまりはどこまでも無法なのであり、この事実を開示する力こそ、沖縄の非暴力不服従の徹底的抵抗が持続的に積み重ね洗練させてきた荒ぶる秩序を創りだす力である。そして、この非暴力の不服従抵抗には、場違いな場を顕現させる根源的な力がある。無法な施設を包囲することに法的になんの問題があるのか、もし問題があるとしたらどの国のどの法に抵触するのか、そしてその法は日本国憲法の下位規定として妥当性をもつのかどうか。そうした問いが一気に共起す

る。こうして、シンプルにして限りなく連鎖していく正義の問いが、ただ座り込むという完全な非暴力の力によって切り開かれるのである。この非暴力の抵抗には、新たな法の空間を準備し、生の秩序を更新させていく、そういう「神的暴力」(ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』)がある。そのことを、私たちは、私たち自身に知らしめていたと思う。

そして私たち以上にこの力の発動を目の当たりにして、何かに気づき怯えていた人たちがいた。それは、ただ座り込むだけの者たちの肋骨にひびを入れるまでの怪我を負わせて「ごぼう抜き」し、法的根拠もないまま警察バスに国会議員や弁護士を含む市民を拘禁した沖縄県警と日本政府であり、そしてその県警に出動要請して市民を威嚇し続けたアメリカ軍である。これらの暴力組織の驚くべき脆弱さは、これらの統制のとれない不法な動きのなかに隠しようもなく顕れている。

沖縄における場違いでイレギュラーな抵抗は、座り込むというただそれだけのふるまいにおいて、軍というシステムに深い亀裂を生じさせる力を私たちが保持しそして行使し得ることを、これ以上ないほどの明晰さをもって知らしめている。日米軍事同盟体制が真に恐れているのは、座り込むという所作において始まる私たちの平和への求めの連帯とその具体化である。この求めが、場違いであるなら、いま場違いであることは、生の必要条件である。

あえて言えば、沖縄という場所で平和や反戦を求めることが、根源的な場違いでなくてなんだろうか。私たちは、断固として場違いなことを求めているのである。では、場違いな私たちは、断固として場違いな何を求めているのか。それはおそろしく単純なことである。それは場である。私たちが平和に生きていく場である。生きていく場を奪い、私たちが生きていく場を人を殺戮するための前線と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

する卑劣な力を排除し、私たちと私たち以外の誰もが、反戦の理念の実質化において生きていく権利への権利が占める場である。

この求めは、断固として場違いであるがゆえに、基地のあるべき場所を指し示したり、基地の応分負担を求めるたぐいの主張とはまったく異なる。すくなくとも、私は、そう思う。基地が占めるべき場を語り配分を討議するための場が必要とあらば、基地封鎖のためにゲート前に座り込むことはない。そんな交渉の場ならば、日米政府が喜び勇んで公式非公式を問わず無数にお膳立てしてくれる。実際、沖縄をめぐる今の政治的駆け引きは、米軍再編という前提を追認する、基地の配分調整の場となりおおせている。日米首脳から「2＋2（ツー・プラス・ツー）」（アメリカ側国務長官と国防長官、日本側外務大臣と防衛大臣による日米安全保障協議委員会）そして沖縄県知事や宜野湾市長にいたるまで、オスプレイや基地そのものに反対することなど絶えてなく、そのような同盟などあるはずのない「日米同盟」なる虚像を言挙げしては国防の必要を執拗に確認し、基地の応分負担主張のみが沖縄からの訴えであるかのごとき粉飾に明け暮れるばかりである。その無残に耐ええぬがために、今回始まった基地ゲート前座り込みは、そのような場の配分にこそ留保なき拒否をつきつけていると、私には、そう思えるのである。今沖縄で生起している拒否は、単にオスプレイ配備のみに留まるのではない。基地そのもの、ひいては日米安保そのものへの拒否が始まっているのである。このとき、国防からこそ私たち自身の生の権利を守るための、絶対的な拒否が求められることになるはずである。

この拒否には、危機の分散と配置を草の根から主張させる、軍事覇権と政治的駆け引きの結託を見抜く知性の力があり、共生を無条件のもとに求める優しさがある。人を思いやる勇気がある。ここに

ないのは、応分の負担と危機の配分を主張するような、どこにでも転がっている狡猾さである。普天間基地ゲート前への座り込みという直接行動は、いわゆる「復帰」後において初めてのことと言われている。むろん、そのことの持つ意味は非常に大きいし、沖縄を生きる人々の怒りと憤りとは、いまや切迫した抗いとなり、その行動は、徹底さと遍在性を増してきているとはっきりと感じる。

しかし、私には、それが突拍子もない出来事のようには思えない。もっと言えば、動きは徹底さを増しつつも、マグマは爆発寸前といったスケベったらしい煽りや激情を感じない。ことは、実に淡々と、しかも秩序と倫理とに基礎づけられた信頼に基づいて展開していると感じられる。そして、ここにこそ、一連の動きのなかに、この十数年のあいだ沖縄県北部の辺野古（へのこ）そして高江（たかえ）で持続されてきた反基地運動への無限の共振と共感が作用していることが、実に明瞭に顕れていると思えるのである。この動きが新しくかつ古いのは、沖縄のなかで、沖縄のなかに埋め込まれてきた出自や地域や階層そしてジェンダーによる分断を超えて、沖縄の運動の歴史的現在を学びなおそうとする姿勢が感じ取られるがゆえである。このとき、普天間基地ゲート封鎖は、辺野古と高江の現在を学び、そして伊江島（いえじま）の米軍土地収奪抵抗運動（一九五五年―）やCTS闘争（巨大石油備蓄基地建設反対の「金武湾を守る会」運動、一九七三年―）を学ぶという教育的実践を包み込んでいるはずである。そして言うまでもなく、この教育的実践には、二〇〇四年八月一三日の沖縄国際大学米軍ヘリ墜落事件に関わる傷の記憶の現在化があり、この記憶に関わる一九五九年の石川市宮森小学校米軍機墜落炎上事件の遠く深い呼び戻しがある。沖縄のなかで沖縄への学びなおしが始まるとき、運動という現場性の遍在化において、あらゆる場が抵抗の場となる。そのことは、場違いな行為が、私たちが生きていく場を、無数の伝播の力にお

いて生成していく営みに重なり繋がる。生の共同性が、ともかくも黙認のうちにまずは座り込むというふるまいにおいて模索され、場を占める。そして、米軍基地のただなかに、幾つもの未聞の「黙認地」が形成され、この「黙認地」に集う私たちは、米軍やその配下にある日本政府をはじめとするいかなる機関の黙認をも待つことも求めることもなく、ただひたすらに基地を見つめることになる。

米軍基地のゲート前でまっすぐに基地に向き合い、そこに座り込むなどということは、私のような臆病者は、考えることさえできないことだった。というより、そのようなことができるとは大山ゲート前バス停にたどりついたときでさえ夢にも思ってもみなかった。しかし、普天間基地大山ゲート前舗道に陣する県警隊の間をなんとなく通り過ぎて着いたときには、私はもう座っていた。気取ったことを言いたいのではない。本当に、ただなんとなく座っただけなのである。ただ、座ったときに、この場違いな抵抗は、場を占めて別の場と場を繋げはじめ、急ごしらえの居場所がすでに生成されはじめていたのだ。この場の生成が、いかに重要な意味を持つか。そのことを、二重三重に私たちを取り囲む多くの沖縄県警隊の本当に虚ろな眼と、フェンス越しに一列に居並ぶ子供のように若い米兵たちの眼とが、あまりに明瞭に告げていた。彼／彼女たちは、場違いな何かが生起して自分たちをすっぽりと包囲し、何かが大きく変わりはじめたことを、おそらくは誰よりも明晰に感じ取っていたに違いない。そのことを証だてるように、彼／彼女たちの眼は、暗がりのなかでずっと怯えていた。座り込んだ者たちが、何を見定めはじめたかを、彼／彼女たちは、その心身の奥で受けとめ学びはじめたはずである。あのとき、何かがもう始まっていたのである。この始まりは、もはや排除によって押しつぶすことはできない抵抗の生の様式化へじかに繋がっている。

2　教　え

しかし、この抵抗における生の様式化の「始まり」は、初めてではない。回帰である。沖縄に生きる者たちそして沖縄を生きる者たちは、遍在性において、この「始まり」を繰り返し生きてきたし、今も生きているし、これからも生きていく。そのことをはっきりと気づかせてくれるのが、次のような屋嘉比収（やかびおさむ）の言葉である。まずは、屋嘉比の言葉と、屋嘉比の言葉のなかに呼び返される人々の声に耳を澄ませよう。

作家の崎山多美氏は、沖縄の復帰三十年を問うエッセイのなかで、三十年前の五月十五日の雨の日の私的記憶として、「復帰ハンターイ」のシュプレヒコールをあげて行進するデモのなかに、制服姿で一人参加した思い出を書いている。その記述に対して、岡本恵徳氏は、三十年前の沖縄の「デモ行進」が、一人の女子高校生の心をとらえるだけの輝きをもちえていたことが印象的だと述べて、次のように指摘している。

つまり、一人で制服のまま中に飛び込む少女の、何ものかから解き放たれたいとする衝動を受け止めることの出来る〝デモ〟だったということです。私にもそういう解放感を求めてデモに参加した記憶があるので、余計にそういうところが印象に残るのかも知れません。デモという「政治的」行為が「個」の内面と分かち難く結びつくことの出来た時期があったと

いうこと、その「私的記憶」をどう語りえるか、そこが問題の一つなのだろうということです。

三十年前の沖縄のデモは、たしかにその形態や身振りや合言葉において、軍隊の行進の形から手が切れていたとは言えない。しかし、そのときのデモは、一人の女子高校生が制服のまま飛び込むことをうながすような解放感があり、「政治的」行為と「個」の内面とが分かち難く結び付いていたことも事実である。その意味で、岡本氏が言うように、その私的記憶を次の世代の若者たちにどのように語るかが今後の重要な問題だと言えよう。そして世代間を越えて、「政治的」行為と「個」の内面とが分かち難く結び付いた新しい反戦運動のかたちを、いかに創造できるかが今の私たちに問われている。（屋嘉比収「殺されたくないし、殺したくない」『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房、二〇〇九年、一八三―一八四頁。初出は、『現代思想』三一巻七号、青土社、二〇〇三年）

一九七二年五月一五日の復帰反対デモへの参加を語る崎山多美の「私的記憶」を媒介として、屋嘉比が岡本恵徳の思想を「継承」しようとするさい、デモに参加する者の「身振りや合言葉」が思考され、そして、解放を求める「衝動」という働きにおける政治的なるものの生成が重視されている点は、示唆的である。そのとき、「復帰ハンターイ」というシュプレヒコールは、その意味するところに焦点が絞られているというより、声そして身振りが開示する政治的なるものの現れのほうにこそ焦点化されている。言い換えるならば、デモに参加する人間の身体への働きへと、問いが差し向け直されて

いるということになるだろう。しかも、このときデモに参加するという行為を「解放感」への求めとして語る岡本恵徳の「私的記憶」が、屋嘉比のなかで個と政治を繋ぐ結び目として再定義されている点は、看過されてはならない。というのも、解放感という自己の心身への働きかけ、あるいは身体からの自己への働きかけのなかからこそ、「政治的」行為が生成されていく「始まり」が、屋嘉比収と岡本恵徳の言葉の呼応のなかに発見されるがゆえである。つまり、「復帰」反対のデモに参加した記憶を語る崎山多美の言葉にみずからの記憶を重ねつつ、そこに「「政治的」行為と「個」の内面とが分かち難く結び付」くことの出来た瞬間を再起させようとする岡本の言葉に新しい反戦運動の未来を見出そうとする屋嘉比は、属性を問われない形で、なにものかから解放されたいという求めから始まる、私的記憶の政治的行為への転位を見ようとしているのである。

このとき、「復帰ハンターイ」というシュプレヒコールに含意される政治的主張の厳密な意味はさほど重要ではなくなる。いわんや、これが沖縄闘争でありうるかどうかはさて置いていい。むしろここで大切なのは、政局論的に見れば完敗となった「復帰反対」からこそ始まる、集団のなか一人の闘いを闘いつつある無数の「少女」たちの、その「ハンターイ」という声が切り開く濫喩的な政治的なるものの現れが、注意深く聞き取られようとしているということである。一人の私的な記憶のなかに呼び戻されるデモへの参加を想起することが、歴史批判の現在化を可能とし、その現在を生きようとする身体の働きそのものが、政治的な潜勢力となって再発見される運動性が、言葉のリレーのなかに躍動している。

この再発見を考えようとするとき、岡本恵徳のエッセイのなかの次のような一節が、私たちにさら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com